



毒ヶ森山塊 鉛温泉スキー場～駒頭山山スキー

手嶋

【日時】 2009年1月10日(土)～12日(月)

【メンバー】L手嶋、古野、佐藤、山川

毒ヶ森山塊……。この不思議な名前の山々は岩手県花巻市の西につらなる標高1000mにも満たない連山だ。しかしここは宮沢賢治の童話の故郷として知る人には知られている。特に「ナメトコ山」は名の知られるところであろう。

自分はこの山域には過去2度ほど来たことがある。いずれもゴールデンウィークのハイキングであったが、素晴らしいブナ林と宝庫とも言える山菜達に歓声をあげながら登ったものだ。脊梁山脈の1本太平洋側の連山にも関わらず、この大自然は特筆に値する。是非他の季節、沢登りや山スキーの形態で来てみたいとずっと思っていた。今回その願いがかない、楽しいメンバーとともにここを訪れることができた。

1月10日

これからすごい冬型になるぞ、高速はきっと吹雪だろう、低気圧の移動との戦いだ、などとの事前の予想とは異なり、その道は湿った雪とミゾレとの戦いであった。朝現地では雨が降っており、道路の雪はなくなっている状態。あたり一帯ビショビショだ。この北の地で何たること。冬型になるのが遅れている様子である。

こういう状態だと、シールが高下駄になって用をなさなくなるという過去の経験から、しばらく様子を見ることにした。お昼近くまで待ち、体が濡れない程度の雪に変わったところで、今日は取りあえずスキー場でスキーをしようということになった。

鉛温泉スキー場、このマイナーなスキー場にも雪は少なく、リフトは2本しか動いていない状態だったが、まあ何とかスキーにはなった。ちょうどいい機会ということで、山川さんを山スキー仲間に巻き込むべく、スキーのポイントレッスンをした。飲み込みはなかなか早いようですね。

何本か滑るうち、急速に冬型になってきたのか雪が軽くなり、見る見るゲレンデの状況も変わっていく。これは山に入れるぞ、ということで、少しでも入っておくことにし、用意をして再びリフトの人となった。

リフト終点ではすでにそれなりの風が吹いていた。しかしこの連山は全山ブナ林なので、今回予想される強烈な冬型でも大して問題ないと踏んだ。そういう天気の時にはある意味最適な山なのだ。

今日は1時間ほど歩いたところで幕を張ることにした。

1月11日

当初の予定では駒頭山から松倉山、そして毒ヶ森までの往復ルートであったが、すでに日程は遅れており、毒ヶ森までは無理である。何とか松倉山の往復まではこぎつきたいところだ。

2ヶ所の急斜面を交えながら概ね穏やかな稜線歩きが続く。当初懸念された雪の量については全く問題ない。ゆったりとスキーを滑らせていく。奥に行くにつれ、この山の象徴とも言うべきブナの大木が現われた。どんどんブナが太くなる。それに伴い灌木も少なくなっていく。このブナ林に会いにきたのである。そして雪から細い身を出したコシアブラの木を古野さんや私は見逃すはずもなく、「あ、またあった！」と楽しみながら進んだ。

それにしても今日は風が強い。終始右側から風が吹いてくる。最初は気にしていなかったのだが、あまりにも冷たいのでフードをかぶる。が時すでに遅く、帰ってから凍傷になっているのを知った。

なだらかな山をいくつも越えていくと、やがて視界の先になだらかな大きな山が現われ、地図から駒頭山であることがわかった。まだ昼前、交代しながらの膝程度のラッセルで結構歩は進んでいるようだ。駒頭山の手前の広大な平坦地にベースを張る予定であったが、意に反してそこは結構風が強い。あっちこっち探してまあまあのところを探して設営したのだが、後になってみると決して風の弱いところではなかった。



ちょうどお昼時分、駒頭山はもうすぐそこだ。時間はあるので今日のうちに松倉山を往復してしまおう。駒頭山は頂上直下しばらくは防火帯のようで木が刈り払われており、風の強い中を進みわずかで頂上に到着。ゴールデンウィーク時には和賀山塊、秋田駒、岩手山などの展望が非常に良かったのだが、今日は冬型で雲が飛ぶ1日、展望は望めな

い。最低限の目的は達したということで、記念撮影をして頂上を後にした。

さて次は松倉山。このスピードだと1時間半くらいで行けると踏んだ。しかしここから見える松倉山は駒頭山とは異なり結構険しい。手前には急な雪稜が控えているように見える。さてどうなることか。

少し戻って相変わらずのブナ林に行く。松倉山に近づくとつれ、ブナ林というよりも灌木帯という感じが多くなって来る。右手から覆いかぶさる雪庇の弱点を山川さんが突破し、雪庇上に行くようになる。松倉山の手前のピークに登るところは左側が完全に切れ落ち、そして急である。段々雪稜っぽくなってきた。



ついに斜度は45度を越え、雪は硬くそして稜線は狭く、短いものの完全な雪稜状態になってしまった。さっき遠望したところだ。スキーでの突破は不可能。先頭にいた私が様子を見るべく少し右手の灌木

木混じりの急斜面をキックステップで登ってみるが、蹴り込みが浅くおまけに灌木がポキポキ折れ、アイゼンや登攀具があるわけではない我々の身支度では結構危険な状況。残念ながらここまで、ということで引き返しの判断をした。無雪期にはこんなところは覚えがないのだが・・・。

しかし駒頭山には登ったし、やるべきことはやったし、まあいいか、ということで、ピークハンターの私としては若干残念ではあったが、来たルートを引き返す。この頃には冬型も弱まった様子で綺麗な青空が広がり、美しいブナの雪景色を堪能しながらテン場に戻った。

夜はさまざまな話題で楽しく盛り上がったが、その中でも山川さんがこの冬の間免許を取るということで、我々男共3人は、「皆で応援するから是非がんばれよ。」と純粹にエールを送った（＾＾；）（＾＾；）。

1月12日

今日は昨日のルートに戻るだけ。少し寝坊をして TENT をたたんで往路を引き返した。雪が降ってトレースが消えたところもあったが、行きよりも大分短い時間でスキー場まで戻ることができ、今山行を終了した。

ようやくここしばらく心にためていた山をいいメンバーとやることができ、私としては大変満足だった。またメンバーもこの山城を気に入ってくれたようで、次は是非沢



に、ということで話ははずんだ。

そんな後日届いた「さわぐるみ」月報を見たところ、昨秋この地で沢登りを行った記録が載っており、記録のあとに「なめとこ山のこと」というエッセイが載っていた。読み始めてみると、沢から帰ってもう一度賢治の「なめとこ山のクマ」を読んだことや、物語に出てくる地名の考察などが記されており、引き込まれてしまった。「ぶよこ記」と最後に書かれていたその「ぶよこ」さんが5名の中のどの方かわからなかったが、とてもいい考察と文章を書かれる方だと感心した。こんな形で山を楽しむと、きっとさらにその山行が深いものになるのだろう。自分も心がけたい。

【行程】 1/10 スキー場リフト終点(15:30)～490m地点テン場(16:35)

1/11 テン場(7:15)～ロボット小屋地点(9:38)～駒頭山直下テン場

(11:50/12:30)～松倉山手前引き換えし地点(14:00)～テン場(15:10)

1/12 テン場(8:05)～スキー場リフト終点(10:55)

【地図】 鉛

